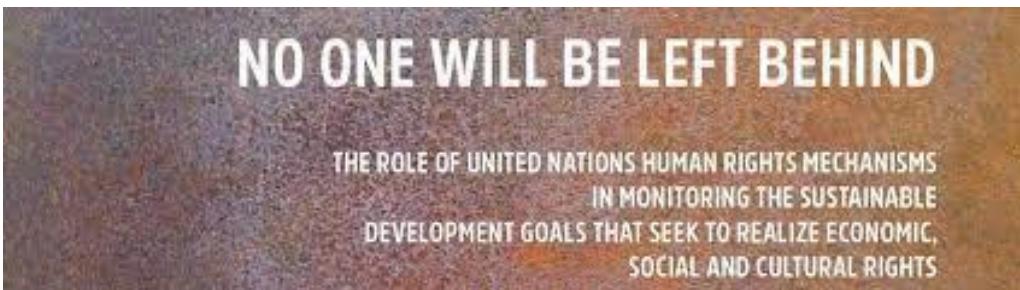




No.70 「誰一人取り残さない」とはどういう意味か？



最近SDGsという言葉を聞かない日はありません。国連が2015年に設定した持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)は、2030年の実現を目指して世界に発信されました。今や政府も企業も、貧困の撲滅など17の具体的な目標に紐づけて、自らの事業活動を説明するようになってきています。

以前のミレニアム開発目標(MDGs 2001~2015)との際立った違いは、次の強烈なメッセージです。
As we embark on this great collective journey, we pledge that no one will be left behind.
この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々は誰も取り残されないことを誓う。(外務省仮訳)

でも現実に、一人残らず全ての人が健康で豊かで質の高い教育を受け平和に暮らす世界なんて無理！ どれだけお金と労力がかかることか！ そんなの神様しかできないでしょ！！
そうです。一人も見捨てることなく(「摂取不捨」)すべての人(「十方衆生」)を救済すると誓ったのは阿弥陀仏(『弥陀の本願』)です。それをスローガンに掲げてやろうというのですから、ただごとではありません。

企業や役所のトップには、できもしないことを目標にするのは無意味で無責任だと考える人が多い。でもやってみなければわからないのに最初から目標を引き下げる人と、あくまで高い理想の実現に向けて努力をやめないとでは、同じ志を持っているように見えて、全く違います。目標がその組織の行動原理になっているか、単なるアリバイ作りをやっているかの違いですね。

教育の分野では、2030年までに障害者や脆弱な立場にある子供などがあらゆるレベルの教育に平等にアクセスできるようにするという目標が書いてあります。
社会全体としては大多数の健常者に合わせてシステムを作るほうが効率的です。だから広く教育の機会を確保しようとすると、できるだけ多数者に合わせてしまう。少数者はわがまま言っちゃいけない、落伍しないよう頑張れ、と多数者に合わせることが求められます。それができない少数者は取り残される…

そうではなくて、一人一人ありのままでそれぞれの能力を生かし評価されるようなシステムが大事なのではないのか。一律の基準で評価し、多数に合わせることを強いるのではなく、一人一人やり方は違っていいという発想。これが誰一人取り残さない社会を実現する鍵なのではないかと思います。いまや一人一人にカスタマイズされた教育システムの開発は着実に進んでいます。デジタルデバイスのアクセシビリティも格段に向上しています。
弥陀の本願も夢ではなくなってきたのかもしれない。今教育現場にいてそう思います。